

問一

語の「意味」が、かつて「こころ」という和語で表されていたという事実は、言葉の意味が人の心の動きと結びついて成り立つことを認識させてくれるということ。

（解答欄 3 行）

問二

自然事象は誰にとっても同一のはずだが、それを言語化する際には、無限に多様な事象に、特定の言語構造に応じた恣意的な秩序と形態が与えられるので、いかなる言語も自然事象に対する普遍性を持ちえないということ。

（解答欄 4 行）

問三

曖昧で捉えがたい感情を言語化すると、あるがままの豊かで流動的な心のありようが硬直してしまうということ。
（解答欄 2 行）

問四

漠然たる感情が、できあいの言葉をあてがわれることで、その言葉のもつ特定の意味の枠組の中で把握され、行動や心もその枠組に沿ったものに導かれるということ。

（解答欄 3 行）

問五

意味論は、言語主体から切り離された言葉の意味だけを客観的な対象としてきたが、言葉が人の認識や感情を規定する面はあるものの、むしろ言葉の意味は時代の中でそれを用いる人の感情によって変わりゆくものであり、言葉と人の心の関係こそが問われねばならないから。

（解答欄 5 行）

問一

清浄な外気に触れ咳をする背後には、健康に留意しなかった後ろめたさや気恥ずかしさのようなものがあること。（解答欄2行）

問二

ライトに照らされた人影が、ふとした偶然で奇怪に歪形され、当人から離れて一人歩きしているかに見えたこと。（解答欄2行）

問三

気ままに夜道を歩いて帰宅しているかに見える人影には、酒を飲んだ理由や他人との関わりといったもの、気をとめることなく、心地よい酔いに自分の心身をおおらかに解放し一人それを楽しんでいるさまが感じられること。（解答欄4行）

問四

当人が知らない間に影だけが一人歩きをして人目を惹くという非現実的な光景から、自己の内にも制御不能の部分があることに思い至り、自己の身体や意識に過剰に囚われて生きてきた状態から逃れ去っていく自由を感じたから。（解答欄4行）

問五

人は通常、自分という存在を他人との関わりや自己の心身と重ね合わせ理解しているが、自分の中には自意識だけではとらえがたい部分があり、それが日常の中で他人との間に思いがけない関係を取り結ぶこともあるということ。（解答欄4行）

問一 三 (1)

後の時代になり和歌の道が廃れていった時から、和歌はむなしく恋愛ごとの仲介をするものになってしまつて、（解答欄 3 行）

問一 (2)

ひたすら飾り立てている歌体や、凝った趣向を主眼として、正しい心を素直な表現で詠むという昔の風体は残っていない。（解答欄 3 行）

問一 (3)

歌体を格調高いものにしようとするその和歌の内容が不十分になり、言葉で委曲を尽くそうとする歌の様子は格調に欠ける。（解答欄 3 行）

問二

和歌が、暗示的な表現で深い趣を表し、自然と人の心を正すことができるので、民衆を教化し為政者たちへの諫言となることによつて、政道の根本となる。（解答欄 3 行）

問三

今の歌人が、古歌の言葉をまね、優美な言葉で飾り立てることにより、逆に和歌の根本を見失うということ。（解答欄 2 行）